
機動戦士ガンダム 学徒兵の戦争

大根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム 学徒兵の戦争

【Nコード】

N8387W

【作者名】

大根

【あらすじ】

連邦のパイロット不足により、学徒動員で已む無くパイロットとなった「ユウト・ミヤナガ」

彼は、激戦のソロモン、ア・バオア・クーを生き残る事が出来るのか？

一年戦争（前書き）

文才がないので、下手糞な文章なのは許してください？

一応、連載となっておりますが、ソロモン、ア・バオア・クーだけなので短クナルかもしれませんm(_____)m

下手な文章が嫌な人は読まないほうが良いと思います。

それほど酷いのです？

それでも良いなら、読んで頂けるとありがたいですm(_____)m

一年戦争

人類が増えすぎた人口を宇宙にうつし、既に半世紀が過ぎていた。
宇宙世紀0079 1月3日

地球から最も離れたスペースコロニー、サイド3がジオン公国を名乗り地球連邦政府に対して宣戦を布告してきたのである。

MS「ザク」の前に連邦の艦隊はなすすべもなく、落とされてゆくブリティッシュ作戦によるコロニー落とし、G3ガスによるコロニー住民の大量虐殺。

開戦からわずか3ヶ月で総人口の半分を死に至らしめた。人々は自らの行いに恐怖した。

戦いは膠着状態に陥り8ヶ月あまりが過ぎた・・・

サイド7で極秘で行われていたV作戦。この計画により作られた連邦の試作MS、RX78-2「ガンダム」

ザクを遥かに凌駕する性能を持つが、量産するにはそのコストを減らす必要があった。それにより作られたRGM79「ジム」この連邦の切り札とも言える機体は各地の戦線へと投入された。圧倒的物量差の連邦はMSの量産により、各地でジオンに圧倒しつつあった。そして、「オデッサ」の奪還・・・ジオンによる、連邦軍本拠地「ジャブロー」の攻略失敗。

これらのジオンの連敗により、地上のミリタリーバランスは完全に連邦へと傾いた。

そして遂に、連邦は宇宙へと反撃を開始するのであった・・・

一年戦争（後書き）

グダグダで、前置きが長くてすいませんm()m
一応、パイロット不足の為、ジムのパイロットとなった学徒兵の戦
いを書こうと思っています。

サブキャラで良い名前がありましたら教えて頂けるとありがたいで
すm()m

回想&mp・キャラクター紹介(前書き)

ユウトの回想とキャラクターの紹介です。

回想& a m p・キャラクター紹介

星一号作戦が発動した。

ア・バオア・クーの姿が目前に見える。

一通りの訓練は済ませた。操縦の仕方覚えている。覚悟も・・・決めた。

ユウト「やってみせる！・・・ユウト・ミヤナガ、行きます！」

俺はジムのペダルを思いっきり踏み込み、宇宙へと飛び出す

（チェンバロ作戦前）

連邦のソロモン攻略作戦。チェンバロ作戦のために俺はジムのパイロットとして宇宙へ上がった。

出撃まで後2時間。俺はサラミス級戦艦「オリオン」のブリッジへと向かっていた。

ユウト「作戦の説明か・・・戦いたくねえよ・・・」

これから行う「殺しあい」に対して、俺はすっかり怯えきっていた。

ユウト「死にたくねえよ！」

そう悪態をつきながら、壁を殴る。

しかし帰って繰るのは痛みだけだ。

泣きそうになりながらもブリッジへと向かう。

？「おい、大丈夫か？」

低くてゴツい声が俺に掛けられる。

ユウト「・・・クレス大尉」

声をかけて来たのはクレス・マクスター大尉。俺の所属する第9小隊の隊長だ。筋肉質の体にゴツい顔。軍人のイメージその物な人だ。

クレス「一体どうした。第の男が泣きそうな顔をして」

ユウト「いえ、これから行う殺しあいの事を考えていましたら・・・」

「うつつむきながら、返答を待つ。」

クレス「そうか。お前は学徒兵だしな。今回が初陣か」

ユウト「はい。これで人生が終わるかも知れないと思うと・・・」

クレス大尉も黙り。沈黙が続く。

？「何言ってるの！私たちが死ぬ訳ないじゃない」

強気な声が聞こえ、振り向くと。

そこには、ツインテールに微妙につり目な目、俺より少し低い身長。

ツンデレそのままと言う少女がいた。

ユウト「誰だ？お前？」

？「口の聞き方に気をつけなさい！」

何様だ、お前は

イラツとしながらそいつを見ていると

クレス「ユウト、紹介してなかったな。その子はシンディ・マクス

ター曹長もう1人の隊員で俺の娘だ」

回想&mp・キャラクター紹介（後書き）

キャラクターの名前のセンスは・・・勘弁してください。
ネーミングセンスがなくて？

意地の激突（前書き）

遅れてすみませんm（——）m
今回もグダグダでよくわからない文章です？

意地の激突

ユウト「もう1人の隊員か・・・クレス大尉の娘!？」

クレス「そうだ。それがどうしたんだ？」

いや、クレス大尉には悪いが似て無さすぎる!

ユウト「本当に親子なんですか？」

クレス「本当だ。失礼な奴だな」

本当なのか・・・確実に母親似だな。

どんな母親なんだ・・・

シンディ「私を無視するな！」

ドガッ

ユウト「うわっ」

シンディのキックで周りながら、飛ばされる俺

ユウト「いつてー、何すんだよ！」

全く、初対面の相手に対してその態度はなんだよ。

シンディ「うるさい!無視したあんたが悪いじゃん!」

なんて理不尽な!

クレス「まあまあ、落ち着けシンディ・・・ユウトもすまんこい

つはじゃじゃ馬でな」・・・しょうがない。クレス大尉にめんど

許してやるか

シンディ「とうさん!いいのよ。ろくに操縦も出来ない学徒兵なん

か

こ、こいつは!

ユウト「今のは聞き捨てならないな・・・お前だって学徒兵じゃな

いか!」

シンディ「私は特別なのよ・・・そうだ、シミュレーターでどっち

が上か決着つようじゃない」

偉そうにしゃがって!

ユウト「いいぜ。その鼻っ柱へし折ってやる!」

こうして俺は、シンディとにらみ合いながら、シミュレーターのある部屋へ向かうのだった。

意地の激突（後書き）

今回はユウトとシンディの対決を書こうと思っています。
見ていただけるとありがたいです m () m

ユウト対シンディ（前書き）

ユウトの機体は

ジム

主武装

プルバップ・マシンガン

シールド

ビームサーベル

頭部バルカン砲

ビームサーベル

シンディの機体は

ジム・キャノン（空間突撃仕様）

主武装

バルザック式380ミリロケットバズーカ

ビームライフル

シールド

頭部バルカン砲

です。

今回もグダグダですいません？

一応、ユウト対シンディのシミュレーター対決になっています。

ユウト対シンディ

俺とシンディはシミュレーターのある部屋へと向かった。

シンディ「あんたなんかにも負けるわけないわよ」

ユウト「はん、その鼻っ柱絶対にへし折ってやる」

そう、言い合いながら、お互いにシミュレーターへ入る。

ユウト「スイッチは・・・これか、対戦モードで接続して」

クレス「おい、今は作戦待機中なんだから、早く終わらせろよ」

ユウト「わかってます。すぐにけりをつけますよ」

シンディに絶対に勝つ！

ブウン。宇宙の画面がうつる。

ユウト「行きます！」

ペダルを踏み込み、サラミスから発艦する。

ユウト「シンディは・・・どこだ？」

姿勢制御のスラスターを吹きながら、レーダーをチェックする。

おかしいな、こちらにこない。

遠距離装備のジムなのか？ユウト「考えてても進まないか。いくぞ
！」

ペダルを踏み込みスラスターを吹き、レバーを倒して機体の向きを替える。

ユウト「シールドは胴体のまえに、銃はすぐに撃てるように構えて・

・よし、大丈夫だ」

マニュアルどりの姿勢を保つ

おかしい、あいつはどこだ。

ピーっ、ピーっ

アラート！？左方向から？バズーカか！

ユウト「不味い！回避！」

レバーをいきよよく倒して機体を右に傾ける。

機体のすぐ横をバズーカの弾頭が通りぬける。

シンディ「今のを避けるの？なかなかやるじゃない。なら……」
「れはどう！」

左方向から、機体がバーニアを吹かしながら接近してくる。
ユウト「くっ、当たれ！」

接近した方向に向け、サイトを移動させ、トリガーを引く。
ズドドドドドッ

マシンガンの弾薬が接近する機体へととんでゆく。

シンディ「あまいわよ」

シンディの機体はそれを楽しにかわす。

ユウト「こいつっ！本当にうまい。かすりもしねえ！」ユウト「く
っ、シンディの機体は……」

識別信号・・・RGC 80ジム・キャノン！？

ユウト「ジム・キャノン？何でこんな機体に！」

再び接近してくるシンディのキャノンに照準を合わせる。

ユウト「あたれ！」

トリガーを引き、ありったけのマシンガンを打ち込む。

シンディ「！？、けど、それぐらい！」

シンディはキャノンを思いっきり上に移動させた。

ユウト「なっ、かわされた！？早く回避行動に！」

だが、もう遅かった。

放たれた、バズーカが俺のジムのシールドを吹き飛ばす。

ズゴゴゴーン

ユウト「うわあっ」

ヤバイ。このままじゃあ

ピーっ、ピーっ

アラート！？・・・ビームだと！

ユウト「か、回避！」

しかし、無情にも接近するビームは俺のジムの胴体を撃ち抜いた。
ピーっ

画面にはLOSEの文字が表示されている。

ユウト「まけた？何も出来ずに・・・」
俺はシミュレーターの中で、只悔やむしかなかった

ユウト対シンディ（後書き）

見てくださった方々、ありがとうございますm(____)m
今回もよくわからぬ文章ですいません？

補完ですが、シンディのジム・キャノン（空間突撃仕様）は14機
作られ、ア・バオア・クーで全滅していますが、死なせたら不味い
ので、今回は15機作られていた事にします。
史実を変えてしまいすみません。

次話も見えていただけるとありがたいですm(____)m

出撃直前（前書き）

今回も何がしたいかは、自分もわからないです？
一応タイトルのとおりの話です？

出撃直前

あのあと、俺はすぐに自分の部屋へかえっていた。

ユウト「負けた・・・」

何も出来ずに負けた自分が堪らなく悔しかった。

プシュツ。ドアが開きクレス大尉が入ってくる。

クレス「ユウト、シンディは強いだろ？」

ユウト「はい・・・全く敵いませんでした。シンディは何者なんですか？なぜ、あんなにも・・・」

おかしい。ジム・キャノンなんて機体に乗ってるし、同じ学徒兵なのによ。

クレス「ユウト。シンディが何故強いかは、俺にもわからん」

ユウト「そうですか・・・」

くそっ、一体なんなんだよ。

ガンツ。壁を殴って見ても、前と同じ痛みがかえってくるだけだ。

クレス「・・・ユウト。」

只な、いくら腕が良くても、いくらいい機体に乗っているからっていつてもな、シンディもお前と同じ、今回が初陣の学徒兵なんだ。

それにお前にはパイロットとしての素質がある。歴戦の戦士の俺が言うんだ。自信を持って」

ユウト「クレス大尉・・・」

そうだ。気分を入れ換えないと、何時までもへこんじゃいられない。

ユウト「ありがとうございます。クレス大尉」

クレス「気にするな・・・シンディ、そんなところに入らないで入ってこい。」

えっ！？シンディ！？

プシュツ。

シンディ「さすが父さんね。ごまかせないか。」

ユウト「いつからそこにいたんだ!？」

シンディ「最初からいたわよ！入るタイミングわからなかっただけよ！」

ふうん。

ユウト「で、何の用だ？」シンディ「うっ、ええと・・・」
なんだよこいつ。黙りやがって。

ユウト「なんなんだよ!？」

シンディ「う、うるさい。最初は言い過ぎて悪かったわね。あんた
案外やるじゃない!って言いに来ただけよ」

ええええええー、シンディが謝ってやがる!どうすれば・・・と
りあえず礼いうか。

ユウト「あ、ありがとな」シンディ「うっ、ちょっ調子乗らないで
よ!」

ユウト「はいはい。わかったわかった。」

相変わらずのじゃじゃ馬ぶりだな。けど・・・悪い気はしないな。

突然艦内放送があった。オペレーター「全パイロットは至急ブリッ
ジへ集まってください。」

クレス「お、いよいよ出撃か。2人ともいくぞ!」

遂に・・・実戦か。

ユウト「本当に・・・」

シンディ「ユウト、行くわよ。なあに、父さんにくつついてれば大
丈夫よ」

こんなときなのにこいつは元気だな。その度胸をわけて・・・足が
震えてるじゃないか。

ユウト「お前も怖いんだろ?無理するなよ。」

シンディ「!??うっ、うるさい」

放たれたビンタが俺の頬に直撃する。

バチン。

ユウト「いつてー」

なにしゃがんだよ!

シンディはさっさとブリッジに向かってしまった。

「ウト」・・・やるしかないか」

決意が固まらないまま、俺はブリッジへ向かうのだった。

出撃直前（後書き）

次回は出撃するところまでは書くつもりです。
クレス大尉の乗機はジム・コマンドにする予定です。

チェンバロ作戦（前書き）

ようやく最初の戦いです？

遅れてすいません m () () m

チェンバロ作戦

宇宙世紀0079年12月24日

連邦軍はジオンの前線攻撃拠点、宇宙要塞ソロモンを目前にしていた。

艦長「チェンバロ作戦開始まで、あとすこしだ。作戦を頭に叩き込むように。まず、我々はパブリクのビーム攪乱膜を形成、MS隊はその間にソロモンへ接近する。なあと、ティアンム提督が新兵器を準備しているそうだ。我々は確実に勝つ！総員解散。持ち場で待機せよ。」

後少して、実戦だ・・・死ぬわけにはいかない！

クレス「固くなるな。シンディ、ユウト。俺にくつついておけ、いな？」

シンディ「わかったわ。父さん。」

ユウト「了解です・・・シンディ、クレス大尉。必ず、生きて帰りましょう！」

シンディ「当たり前よ。こんな所じゃ死ねないわよ。」

クレス「当然だ。全員生還したときが、作戦の成功だしな。」

俺たちは、ノーマルスーツに着替えるために、更衣室へと向かった。
（更衣室）

クレス「ユウト。いいか、絶対に無茶はするなよ。戦争では勇敢な奴から死んで行くんだからな。」

ユウト「わかってます・・・自分だって死にたくないですから・・・」

クレス「臆病過ぎるのもどうかと思うがな。」

ユウト「ハハッ、そうですね。」

クレス大尉は無理にでも、気分を和らげようとしてくれてるんだな・・・自分も怖いはずなのに。

クレス「よし、いくぞ！」俺とクレス大尉はハッチへと向かった。

整備兵「整備は万端だ。安心して行ってこい」

ユウト「ありがとうございます」

俺はジムのコックピットへと向かう。

宇宙は綺麗だ。ここで殺しあいをするなんて、罰当たりな事だな・

・

出撃まで後すこし、早く覚悟をきめないと・・・

コックピットへと入る。

シンディ「ユウト。辛気くさい顔しないでよ！こっちまで嫌な気分になるじゃない。」

ユウト「いきなりなんだよ。ほっとけ！」

全く。少しはおとなしくしろよ。

・・・カウントダウンが始まる。

3・・・2・・・1

パブリクが発進して行く。

宇宙世紀0079。12月24日18時10分

連邦軍のソロモン攻略作戦。チエンバ口作戦が始まった。

チェンバロ作戦（後書き）

結局戦いは次回です？

長々とすいませんm（――）m

ソロモン攻略作戦・前編・(前書き)

一応ソロモン攻略の前編になってます。
相変わらず、きてれつな文章です。

許して下さいm(____)m

ソロモン攻略作戦 - 前編 -

ソロモンの方向にいくつもの火線が見える。既に先発した舞台は戦闘に入っているようだ。

オペレーター「発艦・・・どうぞ！」

ユウト「り、了解。ユウト・ミヤナガ、行きます！」

オペレーターに発艦を指示され、ジムのペダルを強く踏み込む。

ユウト「ぐっ」

上から強いGがかかる。

すぐさま機体のバランスを整える。

すると、1機のジム・コマンドが寄ってきた。

クレス「ユウト。いくぞ。離れるなよ」

そういつて大尉のジムはスラスタを吹かしながら、ソロモンの方へと向かっていく。

ユウト「ちょ、待って下さいよ」

慌ててジムのスラスタを吹かし、着いていく。

シンディ「遅いわよ。早くしなさい！」

シンディのジム・キャノンが俺を抜いていく。

ユウト「おい。支援機なんだから、んなに前にいくなよ」

シンディ「うるさい！別にいいじゃな・・・来たわよ！ユウト前方から敵多数！」

なっ！？俺は慌ててシールドとマシンガンを構える。

すると、すぐさま、多数の弾丸が迫ってくる。

ユウト「うわっ」

急いで回避する

連邦パイロット「うわあああああー・・・・・・・・」

横にいたジムにマシンガンが命中する。

パイロットが断末魔の悲鳴を上げた後ジムは爆発した。

これは・・・本当の戦争だ。ようやく実感した。

前からザクが迫る。

ユウト「やられてたまるか！」

目の前のザクに向かってマシンガンを発射する。

ズドドドドド

当然かわされ、ザクもこちらにマシンガンを撃ってくる。

ユウト「くっ」

上方向に回避する。

ザクが振り向くまえに！

思いっきりトリガーを引いた。

振り向いた瞬間のザクに向かってマシンガンがとんでゆく。

ガガガガという音がジムのコックピットに響き、先ほどまで戦っ

ていたザクが爆発する。

ユウト「はあっ、はあっ、やれたか？」

ピーッ、ピーッ。

アラート！？後ろからか！

目前まで、スカート付きのサーベルが迫っていた。

ユウト「うわあああああー」

死ぬ時って、こんなにあっけないのか・・・

死を覚悟したその時だった。

シンディ「なにやってんのよ！」

チュドーン

という音と共に、目の前のスカート付きが爆発する。

ユウト「はあっ、はあっ、シンディか・・・ありがとな」

シンディ「ふん。何早くも死にかけてんのよ。戦いはまだ続くのよ。

行くわよ！」

そういつて、シンディのジム・キャノンはソロモンへと向かっていく。

ユウト「お、おい。待てよ！」

俺もシンディの後を必死におうのだった。

ソロモン攻略作戦 - 前編 - (後書き)

ええと・・・何が書きたかったのか自分でもわかりません？
すみません m (|) m

ソロモン攻略作戦・中編・(前書き)

すいませんm() () m文章が変わって来てます？
今回はソーラ・レイ照射直前のあたりです。

ソロモン攻略作戦 - 中編 -

ズドドドドド

マシンガンの音がコックピットに響き目の前のザクが爆発する。

ユウト「はあっ、はあっ。な、何機目だ？」

ソロモンに近づくに吊れて敵の数も多くなってくる。

また、スカート付きが迫ってくる。

ヒートサーベルが降り下ろされる。

ユウト「くっ」

シールドで受け、そのすきに左手でビームサーベルを抜く。

ユウト「もらったあ！」

胴体を一闪する。

スカート付きは、真っ二つになって爆発した。

ピーッピーッ

アラートが響き、また敵が接近してくる。

ユウト「ザク二機か。くそっ、まだくるか！」

慌ててマシンガンを撃つ。

しかし、弾はです、カチッ、カチッという音が響くだけだった。

ユウト「弾切れっ!？」

向こうもそれに気づいたのか、近づこうとはせず、マシンガンを撃つてくる。

シールドがないんだ。避けないと！

ユウト「うわあああああー」

必死でスラスターを吹かし回避する。

駄目だ。追い付かれる！

連戦に次ぐ連戦で噴射剤が切れかかっていた。

目の前にザクがせまる。

？「そこか！墮ちろ！」

低い声が響き、ザク二機のコックピットにビームが直撃、爆発する。

ユウト「そのこえは・・・クレス大尉!？」

良かった。助かったのか。

クレス「ユウト。生きてるな？そろそろ補給に戻るぞ！」

ユウト「り、了解」

俺は、クレス大尉に続いて、オリオンへと帰還するのだった。

ソロモン攻略作戦・中編・(後書き)

・・・次回でソロモン編が終わるのか不安になってきました？
もしかしたら、まだ、長引くかもしれませんm(____)m？

ソロモン攻略作戦 - 後編・1 - (前書き)

遅れてすみません？

期末の為、更新おくれますm() () m

ソロモン攻略作戦 - 後編・1 -

ガシヨン、という音と共に、オリオンに帰還する。

すぐさまリグが繋がれて、弾薬が装填される。

クレス「危なかったな。もう少いで、二階級特進だったじゃないか」

ユウト「確かにそうですね」

俺は苦笑混じりにこう言うしかなかった。

本気で危なかったな。

内心ではものすごくヒヤヒヤしている。

クレス「補給完了しだい、再出撃するぞ」

ユウト「了解です」

つかの間の休息を取る。

突然だった。

「ピカッ」

となったと思った瞬間にはソロモンが・・・焼かれていた。

ユウト「な、なんだよ。あれは!？」

クレス「あれが連邦の新兵器か」

あれが!？なんて威力なんだよ!

俺は、ただただ呆然とするしかなかった。

しばらくすると整備士が通信を入れてきた。

整備士「補給完了だ。行ってこい！」

ユウト「了解です。クレス大尉、行きましょう。」

クレス「ああ。まずは、先に出たシンディと合流するぞ・・・死ぬなよ」

ユウト「了解です。こんなところで死ぬませんよ」

当たり前だ。こんなところで死ぬるか!絶対に生き残るんだ!

俺は、強く思いながら、ソロモンへと再出撃するのだった。

ソロモン攻略作戦 - 後編・1 - (後書き)

今回もグダグダです？

次回で、ソロモン攻略作戦は終わり・・・の予定です。変更になる
かもしれませんm) (m

ソロモン攻略作戦 - 後編・2 - (前書き)

遅れてすいません m () m

テストあけで怠けてました m () m

ソロモン攻略作戦 - 後編・2 -

ソーラ・システムの照射後、戦闘中の部隊に合流するために俺たちはソロモンへと向かっていった。

敵の抵抗が薄い・・・何故だ？

ユウト「クレス大尉、敵の様子がおかしくくないですか？」

クレス「確かにな。照射前とはまるで違うな・・・奴ら撤退でもするの？」

ユウト「よ、良かった。戦闘が終わるんですね」

ようやく終わるのか・・・長かったな・・・

クレス「最後まで油断するなよ。何かあるかわからんからな」

ユウト「りよ、了解」

心配性だな、クレス大尉も・・・

すると、前方に艦隊が見えた。

クレス「お、ティアンム提督の第一艦隊だな。」

ユウト「これが・・・さっきの光を照射した部隊ですね」

多いなあ、何隻あるん・・・

ピーッ、ピーッ

突如アラートが鳴り響いた。

ユウト「な、何だ？敵か！？・・・一機だけ？機種は・・・データ

無しだって！新型か！」

クレス「ユウト、気を付けろ、でかいぞ！」

ユウト「くそ、な、なんだよあれは・・・」

巨大なモビルアーマーが、こちらへ向かって来ていた。

すると、艦隊が一斉に主砲を発射する。

ユウト「よし、これで撃破できる」

主砲が巨大モビルアーマーに直撃しそうになった瞬間だった。

巨大モビルアーマーの周りに、まるでバリアでも張っているかのよ

うに、主砲が弾かれたのだ。

そして、巨大モビルアーマーが四方にビームを放った。艦隊は次々と撃沈されてゆく。

そして、中心のマゼラン級までもが沈んでしまった。

ユウト「て、提督のタイタンが！そんな馬鹿な！？」

クレス「ユウト、行くぞ。やるしかないんだ」

やってやる・・・やってやるよ！

ユウト「あたれええええー！」

マシンガンで巨大モビルアーマーに向かって発射する。

しかし、当たってもその巨体は揺るがない。

すると巨大モビルアーマーはこちらを向いた。

その巨体の迫力に俺は全く動けなかった。

ここまでなのかよ？

ユウト「くっ、くそおおおおおー」

そのビームが放たれる寸前だった。

巨大モビルアーマーが下を向いたのだ。

ユウト「な、なんだ？」

その下方向から、戦闘機が迫っていたのだ。

巨大モビルアーマーはそれに臆することなく、足のミサイルを発射する。

ミサイルを受けた戦闘機は巨大モビルアーマーに向かっていく。

ユウト「特攻する気か！？」

戦闘機が巨大モビルアーマーに特攻した時だった。

一機のモビルスーツが巨大モビルアーマーの頭上に立ったのだ。

ユウト「白い・・・モビルスーツ！・・・あ、あれがガンダムか！」

ガンダムはビームサーベルで巨大モビルアーマーに突き刺した。

すると、巨大モビルアーマーは爆炎に包まれて消えた。

ユウト「たった一機で・・・すげえ・・・」俺は只呆然とそれを見ることしか出来なかった・・・クレス「ユウト！生きてるな？」

ユウト「はっ、はい。何とか・・・」

クレス「撤退する部隊の追撃だどよ。行くぞ」

ユウト「まだ続くんですか!?!・・・了解です」

俺は、クレス大尉と共に、撤退する部隊の追撃に向かうのだった。

ソロモン攻略作戦 - 後編・2 - (後書き)

えーと・・・まだ、ソロモン編はつづきます？

今回は、ソロモンの悪夢こと、アナベル・ガトー大尉が登場する予定です。

ちょうど、撤退戦の時に活躍したので、出させて頂きます。

ただ、出番はここだけです？すみませんm()m

追撃戦 ソロモンの悪夢・前編 (前書き)

遅れてすいませんm()m

まだ、ガトーは登場しません？

次回あたりには・・・

追撃戦 ソロモンの悪夢・前編

ガガガガガガ

マシンガンの音が響き、目の前のザクが爆発する。

ユウト「はあっ、はあっ。な、何機目だ!？」

俺は撤退するジオン軍を追撃していた。

圧倒的な戦力差の前に撤退しようとするジオン軍は、撃破されてゆく。

ふと前を見ると、マシンガンを捨て、両手を上げたザクが蜂の巣にされる。

降伏しようとする奴まで撃破していつているのだ。

ユウト「……………ひでえ」

そんなことしか言えないような惨事だった。

戦争だ。それはわかっている。けれど……………同じ人間だろうが!!
なんで……………

シンディ「ユウト!何やってるの!早く追撃するわよ」

モニターにシンディがうつる。

ユウト「シンディか……………お前はなんとも思わないのか?なんの感情もなく殺して!」

心がないのか、こいつは?
すると

シンディ「あんたねえ……………つらいに決まってるじゃない!人を虐殺してるのと同じなんだから!!でも……………やらなきゃあたし達が殺されちゃうのよ!!!!」

こいつ……………

ユウト「すまん……………シンディ、行くぞ!」

シンディ「……………ようやく迷いをすてた?……………いくわよ!」

ユウト「……………ああ、なんとか……………」

俺はまだ、迷いを捨てきれたわけじゃない。

けど、シンディのあんな顔を見たら、こつ言っしかなかった。
俺は・・・どうすればいいんだ!!!

追撃戦 ソロモンの悪夢・前編 (後書き)

・・・ひどすぎる文章ですいませんm) (m

自分でもわかっただけはいるんですが、何せ文才が無いもので・・・
次回は、迷いながらも戦うユウトが、いよいよガトーと戦う!?!?
と、思います?

まだ、かんがえてなくて?

追撃戦 ソロモンの悪夢・中編 (前書き)

更新遅れてすいません？怠けてましたm(_____)m
今回は一応ガトーが出ます・・・すこしですが？

追撃戦 ソロモンの悪夢・中編

サラミスの艦隊が主砲を一斉射する。

目の前に火線がはしり、いくつもの爆発が起こる。

ユウト「圧倒的だな・・・」

連邦の優位をめめあたりにしていると

ピーッ、ピーッ

ユウト「敵か!？」

被弾したザクがこっちへ来ていた。

ユウト「悪いけど・・・落ちろ！」

ガガガガガ

マシンガンをザクに撃ち込む。

ザクは蜂の巣になり爆発する。

くそっ、いつまで続くんだよ!

すると、一機のジム・キャノンが寄ってきた。

シンディ「ユウト。ここはもういいから、向こうの援護に行くわよ。」

ユウト「・・・わかった。」

ジム・キャノンについて移動する。

前方に艦隊が見える。

シンディ「なかなか苦戦してるわね」

ユウト「そうだな」

未だに多数の敵が、抵抗しているようだ。

シンディ「よし、援護する・・・」

シンディが言い切る前だった。

連邦パイロット1「な、なんだこいつ!? はやっ、っわああああ

あー」

パイロットの断末魔が響く。

連邦パイロット2「あ、青いスカート付き!?!?!? うわっ、くる

なっ・・・」

断末魔が次々と響き、いくつもの爆発が起こる。

さらに、サラミス級の一隻が沈む。

連邦士官「これは・・・悪夢か!?!?...うわあっ」

サラミス級がさらに沈む

何が起こっているんだ!?

ピーッ、ピーッ

なんだ!?

接近警報・・・スカート付きか

ユウト「ん?なんだあのスカート付き?青い・・・まさか!?!」

さっきの奴か

急いで回避姿勢を取る。

ヒートサーベルが迫り、左腕が斬られる。

ユウト「よけれ・・・てねえええー」

すぐさま加速して迫ってくる。

さらに、後ろに回避するも、胴体をかすり、コックピットが揺れる

ユウト「がはっ・・・」

目前にヒートサーベルが迫る。

俺は・・・死ぬのか!?

ユウト「うわあああああー!。し、死にたくねええええー」

ビシュッ

間にビームライフルが走る。

シンディ「ユウト。生きてるわね?」

ユウト「し、シンディか・・・助かつ・・・た・・・」

いてえ、さっきの衝撃か・・・

シンディ「後は・・・任せなさい!」そう言って、シンディは青い

スカート付きとつばぜり合いを始める。

俺は、ただ、見ている事しか出来なかった。

追撃戦 ソロモンの悪夢・中編 (後書き)

えーっと・・・ユウトは呆気なく負けます？

今回はシンディVSガトー・・・にする予定です。

ひよっとしたら、後編・2とかになるかもしれません？
相も変わらずグダグダですいません？

追撃戦 ソロモンの悪夢・後編 (前書き)

一応今回でソロモン編は終わる事ができました？
只・・・非常に不味い事になってしまいました(- - ;)?・・・

追撃戦 ソロモンの悪夢・後編

シンディのキャノンが一方的に青いスカート付きにやられてゆく。戦いは圧倒的だった。

つばぜり合いを初めてまもなく。

シンディのキャノンは右手とキャノンを切られ。

避け続けるばかりの一方的な暴力が続いていた。

ユウト「くそっ・・・嫌だ・・・死にたくない・・・けど、やらなきゃシンディが！」

出たら確実に殺される。

俺は動けず、ただただじっとしていた。

けがで動けなかった。それを言い訳にしたかった。

そうしなければ、シンディを見捨てたと攻められる気がしたからだ。

俺は・・・俺は・・・俺は

ユウト「どうしたいんだよ!!!」

動けよ・・・動いてくれよ!

俺の手足!

動けよ!!!

シンディ「きゃあああああー」

シンディのキャノンの両足が斬られる。

ユウト「シンディ!」

俺の決意が固まるより早く!

一機のジム・コマンドが飛び出した。

クレス「シンディィー」

ユウト「クレス大尉!!!」

クレス大尉のジム・コマンドは果敢に青いスカート付きに迫って行く。

クレス「シンディ!下がっている」

シンディ「父さん・・・わかったわ」

シンディのジム・キャノンが下がる。

ジム・コマンドがビームガン撃てば、青いスカート付きが避けつつ接近させないように牽制射を行うという攻防。

クレス「シンディは・・・やらさん！」

それは、親としての責任に聞こえた。

ユウト「クレス大尉・・・」

俺は・・・なんて情けないんだ！何も出来ず、シンディを・・・すると、クレス大尉のジム・コマンドが、青いスカート付きに対して、ビームサーベルでの、接近戦をしかけた。

懐に飛び込んだ！やれるんじゃないか！？

そんなふうには思えた。

そして、ジム・コマンドのビームサーベルが青いスカート付きに迫る直前だった。

ピカッ

青いスカート付きの胴体から、光が発せられたのだ。

目眩まし！？

クレス「ま、前が！」

怯んだ。ジム・コマンドの右手・・・サーベルを持った手を、青いスカート付きのヒートサーベルが斬る。

クレス「くっ」クレス大尉は、残った左手のシールドで、ヒートサーベルを防いでいた。

ヤバイ！・・・シールドが溶けてる！！

シンディ「父さん！！」

クレス「くそっ・・・シンディ、もうちょっとおしとやかになれよ！？」

シンディ「そんなっ！何いってるのよ。父さん！！」

クレス「せめて、お前の結婚式ぐらいまでは生きてかったな・・・」
シンディ「ふざけないでよ・・・父さん！！」

モニターには今にも泣きそうな顔のシンディがうつっている。

嘘だろ・・・クレス大尉・・・まさか！！

ユウト「クレス大尉！何いつてるんですか！ふざけてる場合じゃ・・・」

クレス「ユウト・・・シンディを・・・頼むぞ。」
モニターに移ったクレス大尉の顔は・・・娘の事を思う、優しい親の顔だった。

ジユウウウ

という、溶断特有の音が響き・・・クレス大尉のジム・コマンドが、爆発し、爆炎に包まれる。

嘘だろ。クレス大尉が・・・そんな！

ユウト「クレス大尉いいー」

シンディ「とうさぁーん」

モニターに泣きじゃくるシンディの顔が移る。

その時

パシユッ

と、信号弾が光った。

青いスカート付きは、それに反応して下がって行く。

俺は・・・中破したジムのコックピットで、ただただ泣きじゃくるしかなかった。

追撃戦 ソロモンの悪夢・後編 (後書き)

クレス大尉が・・・大事な話なんです、自分の文才の無さのせいで、ひどい話になってしまいました？

気をとりなおして・・・次回からは、星一号作戦、ア・バオア・クー編 に、入って行きます。

例によって、前置きが長いですが・・・許してくださいm () m ?

戦没者への追悼（前書き）

えーっと……とりあえず更新遅れてすいませんm()m

理由は……ありません() () キリッ

……サボってましたm()m

まだ、見てくれるかたがいて、ものすごくありがたいですm() ()

m

まだ、早いですが、次回書こうと思ってるの、キャラクター名が
考え付かなくて？

良い名前がありましたら、是非、教えてくださいm() () m

あと、下手なりですが、ガンダムでリクエストありましたらお願い

しますm() () m

ほぼ全部見えますのでm() () m

戦没者への追悼

艦長「・・・チエンバロ作戦全ての戦没者に対して、哀悼のいをひようし、敬礼!！」

ユウト& amp ;シンディ「・・・」

空っぽの棺と、花束が宇宙に投げられる。

俺たちは、何も入っていない棺を見ているしかなかった。
部屋に帰る途中だった。

シンディ「私のせいだ・・・」

ユウト「えっ?」

シンディ「私のせいで、父さんは死んだんだ!!私なんか・・・居なければ!！」

そういつて、シンディは泣きながら部屋に帰ってしまった。

ユウト「・・・シンディ」

掛ける言葉が思い浮かばず、俺は突っ立っていることしか出来なかった。

ユウト「・・・寝よう」

俺は、部屋に帰ってすぐに寝てしまった。

ユウト「う、うーん」

なんか苦しい?

?「・・・きる!起きろ!ユウト!」

ユウト「ふえっ?」

な、なんだ?

ユウト「えっ・・・」

俺は目を疑った。

ユウト「嘘だろ!?!・・・クレス大尉!?生きてたんですか!?!」

クレス「いや、死んださ」

ユウト「そうですよね。あたり前ですよね・・・」

目の前で爆発したんだ。見間違えるわけないか・・・

ユウト「すいません・・・何も・・・何も出来なくてっ!!」

クレス「ユウト・・・気に病むな。確かに死んだのは残念だ。只な、シンディを、お前を守れてよかったと思ってる。だからな、お前は気にするな。お前は、いまお前にしか、できない事をやれ」

ユウト「俺にしか・・・出来ないこと？」

クレス「言ったる？」シンディを・・・頼む』って、俺はもう出来ない。だから、お前がシンディを守れ」

ユウト「でも、シンディの方が・・・」

クレス「弱い。何故だかわかるか？」

ユウト「えっ?・・・わからないです・・・」

クレス「言ったる?お前には、『素質がある』って、俺の太鼓判つきだ」

ユウト「クレス大尉・・・」

俺は、出来が良い方じゃない。むしろ悪い方だ。けど、クレス大尉はそんな俺に任せてくれる。

・・・やるしかない。俺は・・・シンディを・・・守る!!

ユウト「クレス大尉!俺がシンディを守ります!!」

だから、安心してください!!」

クレス「そうか。シンディを、娘を頼む・・・じゃあな」

ユウト「クッ・・・うわっ」

目の前が急に眩しくなってくる。

ユウト「クレス大尉いいー」

シンディ「起きなさあーい!!」

ユウト「んぎゃっ!!」

シンディ「やっと起きた?早く訓練始めるわよ!。次の作戦まで時間ないんだから」

・・・なんて女だ!少しはおしとやかになれよ。クレス大尉が泣いてるぞ

ユウト「わかったよ!・・・お前、もう大丈夫なのか?」

シンディ「うん・・・いつまでも悲しんじゃいられないし。父さんも成仏できないしね。」

そうわらってきた笑顔は、とても可愛かった。

・・・ヤバい。かわいい。・・・なんか負けた気分だ。

おっと、言い忘れてたな

ユウト「・・・シンディ、これからは、俺がお前を守るからな」

シンディ「なっ！」

おっ、赤くなってる。かわいい・・・

シンディ「何言ってるのよー！あと、回想駄々漏れえええー」

真っ赤な顔のシンディが繰り出したパンチは、俺の腹を直撃した

ユウト「ぐぼあっ！！」　な、なんて女だっ・・・

うすれゆく意思の中で最後に見たのは、真っ赤になってる茹で蛸のようなシンディの顔だった。

12月26日

一年戦争最後の戦いまで、あと少し

戦没者への追悼（後書き）

・・・悪ふざけしすぎました？

はい。ユウトはシンディとくつつきます？

文章力がないので、過程省くかも知れませんが？

これからも生暖かい目で見守っていただければ幸いですm
（
m
次回から、星一号作戦編に入ります？・・・予定です？

新しい乗機（前書き）

新しい乗機

えーっと・・・主人公の機体が変わります（・・・）

理由は・・・自分が好きだからです？

シンディは変わりません。

ユウトは、これからは活躍します！！・・・多分ですが？

新しい乗機

ユウト「当たれ!!」

モニターの中で動き回る、シンディのキャノンにマシンガンを発射する。

シンディ「甘い甘い!!」

シンディはそれを上下に回避し、接近してくる。

ユウト「くそっ!!」

バルカンで牽制射をするも、シールドで防ぎながら、接近してくる。その際には、ビームサーベルが握られている。

ユウト「くらってたまるか!!」

シールドでそれを押さえつつ、バルカンをコックピットに向かって勝った!!

シンディ「ふん・・・キャノンを忘れてるわよ!!」
えっ?

ドカンツと音がなったと思ったら、目の前には、LOSEの文字
零距离っておい!

シミュレーターからシンディが出てくる

シンディ「また私の勝ちね!!」

ユウト「うるせえ、あれだとキャノン駄目になるじゃねえか」

シンディ「出し惜しみはしない主義なのよ」

ユウト「長期戦だったら、どうするんだよ!」?

シンディ「死ぬよりはましよ」

ふんつと、言っつてそっぽを向く。

ぐぬぬ・・・負けたから、何も言えん・・・

実際は中々良い勝負が出来てると思うんだけど・・・ はあーつ
と、ため息を付き、ベンチに座ると

シンディがこちらへ来て

シンディ「あ、あんたも結構やるように・・・」

あ？何言ってるんだ？

ユウト「何だ？一体・・・」

シンディ「ッ！う、うるさい！！」

ユウト「ぐぼあっ」

ま、またかよ！

あれいらい何かと殴られるのだが、どうやら耐性ができてしまったようだ。

・・・全く嬉しくないがな。

シンディは、どっか行っちゃったしなあ。

どうしたものか？・・・

悩んでいると、

艦内アナウンス「ユウトミヤナガ伍長。直ぐに、ブリッジに来てください。」

ユウト「呼び出し！・・・なんか不味いことしたか？」

愚痴りながらもブリッジへと向かう

艦長「君のジムは損傷が酷くてな。・・・クレス大尉のために要請していた新型を回してもらったことになった」

ユウト「えっ！？」

クレス大尉がのるはずだった機体・・・

艦長「君が一番適任だと思ってるな。機体名は、RGM-79SC『ジムスナイパーカスタム』だ。」

ユウト「・・・スナイパーカスタム・・・！？俺に狙撃手をやれってゆっんですか！？」

無茶苦茶だ！

艦長「話をよく聞け。何も君に狙撃手をやれと言っているわけではない。スナイパーカスタムは、総合的に機体性能を上げた機体だ。」

ユウト「そうなんですか？」

艦長「ああ、ちなみに『E-1用』の機体だからな」

ユウト「E、E-1用ですか！？」

責任重大だな・・・

艦長「大尉の娘さんのためにも・・・頼むぞ」

艦長・・・

ユウト「わかりました。俺に使わせてください！」

艦長「よし、明日には届くからな。急いで設定済ませろよ」

ユウト「了解です」

設定とか苦手なんだよな・・・やるしかないか

俺は、小さな覚悟を決めた。

この日、地球連邦軍総司令官、ヨハン・エイブラハム・レビル將軍は、『星一号作戦』の最終目標を、サイド3であると、明らかにした。

新しい乗機（後書き）

ユウトの機体は

RGM-79SC「ジムスナイパーカスタム」

武装

バルカンポッド（オリジナルの設定です）

ボックスタイプビームサーベルユニット×2（2つあるのは、オリジナルの設定です）

R-4タイプビームライフル（いわゆるスナイパーライフルです）

ハンド・ビームガン×2（ふくらはぎに着いています）

プルバップマシンガン（腰に予備で着いています。オリジナルの設定です）

シンディの機体は

以前と変更なし！！
です

次回も見てもらえるとありがたいですm（_____）m

次回作のリクエスト。どうかお願いしますm（_____）m

戦闘訓練（前書き）

更新遅れてすいませんm（　　）m

初めてのコメントをいただきまして、少しなおしていました。

かえって、変になっていましたら・・・また指摘をお願いしますm

（　　）m

今回から、少しだけ長めにするつもりです・・・どちらにしる短いですが？

戦闘訓練

艦長は、淡々と、次の命令を読み上げた。

艦長「まず一つは、撃沈された巡洋艦ネイブルの第24ジム小隊を我々が受け持つ事になった。

もう一つはジムスナイパーカスタムを受けとるために、一旦戦列を離れる。受領のためにコロンプスとの合流地点へ向かう。

いいか！この付近は未だにジオンの勢力圏内だ。気を引き占める！何かあれば、第24小隊だけで対応することになる。以上だ。」

俺たちは、俺の新しい機体の受領のため、一旦レビル將軍の主力艦隊から、離れる事になった。

それでも、対して距離が離れているわけではないのだが、用心に越した事はない。

ユウト「新しい機体か・・・」

スペックを見た限りではジムの比ではない。

俺にパイロットが勤まるのか？・・・

ユウトは一瞬悩んだが、直ぐに考えるのをやめた。もう決まった事だからだ。

ユウト「それにしても、新しい小隊って・・・」

？「おい。そこのガキ！」

ユウト「はいっ！？（突然なんだ？びっくりするじゃないか）」

ユウトは振り向いて相手をみてみた。

若者2人組がいちやも・・・もとい話しかけて来た。

?2「新型機に乗るからって、調子に乗るなよ!」

ユウト「そんなこといわれても、決定事項ですから・・・(めんどくさいのに絡まれたなあ)」

ユウトは、めんどくさそうに、そう言った。

?2・3「ああっ!」

その言い方が気に入らなかつたのか、より一層ユウトを睨み付けてくる2人

ユウト「(どうしたもんか・・・)」

すると、2人の後ろから、もう1人の若者が近づいて来て話し出した。

?3「おい、お前らも不満があるなら、戦って見たらどうだ?訓練にもなるし良いんじゃないか?」

?1・2「そりゃ良い考えだな。クソガキいいな?」

ユウト「良いですよ。行きましょう(こっちの2人はともかく、中々話せるやつだな)」

それはユウトにとっても願ったり叶ったりの事だった。

しばらくは出番がないので、今のうちに訓練をして起きたかったのだ。

?3「いろいろと悪いな。この2人は血の気がありすぎてな。俺は、

ビリー・ヘイズ。階級は少尉だ。第24ジム小隊の小隊長をしている」

何か気にさわったのか、2人は機嫌がよくないようだ。

?1「ビリー！余計なこと言うなよ。・・・俺は、マイク・ロジャース。階級は軍曹だ。」

?2「ちつ。俺はロブ・スキングラード。階級は同じく軍曹だ」

ユウト「俺は、ユウト・ミヤナガ。階級は伍長です」

そう言っつて、自己紹介をすませつつ、ユウトたちは、シミュレーター室へと向かった。

ビリー「よし、先に撃破された方が負けのシンプルなルールだ。負けた方は・・・夕飯奢りだ。いいな？」

ユウト「わかりました。」

そう言っつと、ビリーは何か苦手そうな顔をした

ビリー「ため口でいいぜ。堅苦しいの苦手なんだよ」

ビリーは中々いいやつというイメージがユウトの中では出来上がっていた。

ユウト「わかった」

ロブ「はっ、ボコボコにしてやるぜ」

マイク「後悔するんだな。まっ、俺の出番は無さそうだな。ロブが負ける事は無さそうだしな」

ユウト「なんなら、2人相手でも良いぜ」

マイク・ロブ「ニヤツ。後悔すんなよ」

そう言つて、チンピラ2人はコックピットへと入って行った。

ユウトは、しまった!と思つて2人と同じようにコックピットへと入って行った。

ユウト「チンピラ2人は・・・ジム・コマンド!良い機体乗ってんな」

ユウトはもったいないなあと思ひながら、ジムを発艦させる。

すると、直ぐに視界に移った。2機のジム・コマンドを見つけた。

ユウト「単純だな・・・」

ユウトは牽制射にマシンガンを発射しつつ、接近する。

2機のジム・コマンドは左右に別れて回避・接近して来た。

ユウト「挟み込む気か!?!」

ユウトは慌てて機体を下げる

今までいたところには、ビームが走っていた。

マイク「はっ、なんだこいつ？弱いな！」

ロブ「全くだ。口ほどにもねえ！」

ユウト「お前ら・・・調子に乗るな！」

ユウトはジムを左の・・・ロブのジム・コマンドの方向に合わせた。

ロブ「はっ、やられに来たか！」

お互いにビームサーベルを持ち、接近する。

ユウトはその時、シールドを持った手に、マシンガンを持たせるのを忘れなかった。

互いに接近し、ビームサーベルが交錯する寸前だった。

ユウトはニヤツと笑い。

ユウト「かかったな！」

機体を後ろに下げた。

それにより、ロブのジム・コマンドのサーベルは虚空を切る。

ロブ「なっ、なんだと！」

とっさに回避しようとするも、既に遅かった。

ジムのマシンガンが、発射され、

ガガガガガ

という音と共に、ロボのジム・コマンドは爆発する。
ユウト「一機め！」

ロボは愕然としながら、こっぴどい。

ロボ「嘘だろ！」

マイク「ロボのアホが！当たれっ」

マイクのジム・コマンドがビーム・ガンを発射する。

ユウトのジムは完全には避けられず、マシンガンを持って行かれた。

ユウト「くっ」

マイク「やったぜ」

マイクは調子に乗ったのかビーム・ガンを乱射しながら接近してきた。

そして、ビームサーベルを構える。

ユウトのジムもサーベルを構える。

お互いの機体が接近し、サーベル同士が交錯する

ユウト「くそっ・・・一か八かだ！」

ユウトは左手のシールドを使って、ジム・コマンドの右手を持ち上げた。

マイク「何っ!？」

シールドはジュウジュウと溶けて行くが、それよりも早く、ジムのサーベルが胴体を一閃する。

ズバッ

という音と共に、マイクのジム・コマンドが爆発する。

マイク「んなバカなっ！」

ユウト「か、勝ったのか!？」

ユウトはWINと浮かんだ文字を見ながら、コックピットを出た。

ユウト「ふう。何とか勝てたか」

すると、2人もコックピットから出てきた。

ロブ「お前どんなインチキをしたんだ！」

マイク「そうだ、じゃなきゃ俺たちが負ける分けないだろ！」

ユウトとしては、実力で勝ったと言いたいのだから、めんどくさくないそうなので中々言い出せないのだ。

ビリー「言い訳するな。ガキだと思ってなめたお前らの完敗だ。」

ユウト「ありがとな、ビリー」

ビリー「なあに、構わんさ。お前の実力も見れたしな。俺はお前が新型機に乗るのに反対じゃないぜ。お前らはどうなんだ？」

ロブ「ちっ、わかったよ。お前が新型に乗るのに反対はしない。」

マイク「以下同文」

ユウトはホツとしながら、勝利の余韻に浸るのだった。

ユウト「あっ・・・ちゃんと夕飯奢れよ。一番高い奴な」

ロブ・マイク「くそがっ・・・わーったよ」

不機嫌そうな2人を見ながら、ユウトは満足な夕飯を楽しみにしていた。

コック「はい。Aランチおまちどう!」

ユウト「やったぜ。一度食いたかったんだよな」

一番高いランチを前にしながら、ユウトは2人を見た。

ロブ「覚えてろよ!」

マイク「夜道に気を付けるよ!」

ビリー「お前らはしつこいんだよ!」

ビリーの鉄拳制裁により沈黙する2人。

ユウト「いただきまーす!(いいきみだぜ)」

ユウトがAランチを口に運ぼうとした瞬間だった。
しゅっという音と共に放たれた鉄拳が、ユウトの後頭部に直撃する。

ユウト「ぶっ！」

ガッツと言う音と共に机に顔面をぶつけるユウト

ユウト「いつてえー！誰だよ！？」

バツと振り向く

シンディ「あんたねえ・・・先に行ってんじゃないわよ。私が行くまで待つてなさいよ！」

ユウト「おい！理不尽すぎるだ」シンディ「黙りなさい！」

ユウト「わかりました！」

あまりの迫力に従うユウト。

強いものには従う。これが賢い生き方だよユウト

シンディ「解ればいいのよ！ん？何、Aランチ？少し寄越しなさいよー！」

図々しく箸を伸ばしてくるシンディ

ユウト「わっ、止めるよ！Aランチなんてめったに食べねえんだから」

シンディ「わかってるわよ・・・だから寄越しなさい！」

ユウト「(理不尽すぎる)」

このままAランチが食べられる、と思った瞬間だった。

ロブ・マイク「ねえねえ、こんな奴よりも、俺たちと食べない!？」

シンディ「何? チンピラ2人組は黙ってなさい!」

そのまま固まるチンピラ2人組

ユウト「(お約束だな)」

ビリー「はっ、気の強い嬢ちゃんだな。気に入った。俺は第24ジム小隊の隊長、ビリー・ヘイムズ少尉だ宜しくな」

シンディ「へえ、あんた中々話解るわね。私はシンディ・マクスタ
ー曹長よ。」

ユウト「(だろ。どこかのチンピラやお前とは天の差・・・ぐぼあ
っ)」

しゅっ

と、放たれたパンチで悶絶するユウト

シンディ「今失礼なこと考えたでしょ」

ユウト「そんなこと・・・(なぜ解る!? あれか、ニュータイプっ
てやつなのか!?)」

本気でそう考えてしまうユウトだった。

ロブ「俺は口」

シンディ「チンプリラ1ね」

マイク「お」

シンディ「チンプリラ2ね」

言い終わる前に決められて凹む2人組

ユウト「よく言ったー！」

心の中で軽く共感していたユウトだった。

シンディ「それはそうと・・・Aランチ食べさせなさいよ！」

ユウト「げっ・・・わかったよ」

しぶしぶランチを差し出すユウト

シンディ「何やってんのよ!? わ、私に食べさせなさい！」

あーんと口を広げるシンディ

ユウト「マジかよ！わ、わかった」

赤くなりながら、Aランチの唐揚げをシンディの口へと運ぶ

シンディ「モグモグ。な、中々美味しいわね」

ユウト「(羞恥プレイさせやがってー!)」

ロブ・マイク「ヒューヒュー、おあつい・・・ぐぼあっ」

そのあとチンピラ2人組がシンディにぼこぼこにされたのは、言うまでもなかった。

戦闘訓練（後書き）

えーっと・・・何かすいませんm（ ）m
新キャラクターの口調とネーミングセンスのなさは、作者の文才の
無さから来るものです。

とりあえず、3人組は機体はジム・コマンドです。

ビリーが話がわかる、クレス大尉の代わり・・・のつもりです。
残り2人はチンピラです。

次回は諸事情により、更新遅れますm（ ）m

残り短い？かも知れませんが、生暖かい目をお願いしますm（ ）

m

あ、コメント本当にありがとうございましたm（ ）m

また、何かありましたら、気軽にお願いしますm（ ）m

ソーラレイ照射（前書き）

更新遅れてすいません？

そのわりには、短いですが、許してください m——（ m

今回は、タイトルの通り、ソーラ・レイ照射の直前、直後の話です。

ソーラレイ照射

ユウトとシンディが羞恥プレイを行い、チンピラ2人がぼこぼこにされていたのち、巡洋艦オリオンは艦隊を離脱しようとしていた。

艦長「よし、そろそろ離脱するっ……ん？艦隊の動きがおかしいな？何か連絡はあるか？」

オペレーター「いえ、何も……えっ、ジオンの船？一体何が？……ちよつと！？もしもし！」

オペレーターは焦りながら、必死に通信をしようとしている。

オペレーター「だめです。回線が混雑しています！」

艦長「うーむ……方位修正。我々は、とにかく、受領地点へと向かう！」

艦長の声と共に、巨大な巡洋艦は、艦隊から離れて行く。

ユウト「はあ……。やることねえしなあー」

自らのベッドでゴロゴロするユウト

他のパイロット達と違って、機体がないユウトは暇なのだ。

因みに、他の4人のパイロットは、すでにモビルスーツで待機中だ。おそらく、そう遠くないうちに、発進する事になるだろう。

ユウト「大丈夫なのか？」

なにかしら嫌な予感がしてならないのだ。

ユウト「気にしてもしょうがな・・・」

その時、艦全体に艦内放送が響いた。

オペレーター「第24ジム小队。出撃してください。シンディ機は補給終了しだい出撃してください」

シンディ「了解」

どうやら、護衛につくようだ。

ユウト「もうそろそろだな・・・」

ユウトは状況を確認するためにブリッジへと向かう。

プシュッ

という音と共に扉が開く。

目についたレーダーを覗いて見ると、主力艦隊とは結構離れているようだ。

ユウト「結構離れたな」

そんな事を言いながら感慨に耽っているときだった。

オペレーター「前方にコロンブス。確認出来ました！」

どうやら、輸送艦が到着したようだ。

オリオンの前方に、四角い特徴的なフォルムの艦が見えた。

オペレーター「コロンブスから通信。荷物を受け取りに来てくれとの事です。ユウト・ミヤナガ伍長直ちにブリ」

ユウト「もう来てますよ。」

オペレーター「ひゃあっ！！来てたんなら言ってくださいよー！」

ユウトが突然声をかけたためにオペレーターは驚いているようだ。

ユウト「（気づいてなかったのかよ）」

ユウトが何を今更と思っていると艦長が命令を出し始めた。

艦長「よし、ランチを出す。整備班数名で、ジム・スナイパーカスタムを受領してこい。

選抜は班長に任せる。いいな？」

整備班長「わかった。さっさと受け取ってくる。」

モニターに移った班長は、そう言って回りの部下に声をかける。

艦長「ユウト伍長！受け取り次第、調整に入る！いいか!？」

ユウト「了解です！」

ユウトも新型機到着の緊張感を感じていた。

ランチが発進する。回りには敵の機影もない。

ユウト「良かった。敵はいないみたいですね」

艦長「ああ、だが油断するな。引き続き警戒に当たれ。」

〈同時刻〉

?1「……ーラ……イの照準を……ル……ルバ……合わ……照射」

?2「……解……ました」

一見コロニーに見える『それ』は、光を集めたかと思うと、その光を一気に照射した。

その光は、確実に連邦軍へと迫っていた。

?1「フフ……フフフ……」

その嫌らしい笑みは旧世紀の独裁者ヒトラーを彷彿とさせる物だった。

〈オリオンのブリッジ〉

オペレーター「新型機、受領したそうです。今から帰投します。」

艦長「そうか何事もなくすん」

艦長が言い終わる前に、宇宙に光が走った。

それと同時に、レーダーに写っていた主力艦隊が消え失せる。

ユウト「今は一体何だ！？主力艦隊はどうなったんだ！？」

艦長「急ぎ艦隊に連絡を取れ！！」

オペレーター「了解・・・駄目です。回線がパンクしてます」

すると、一本の通信が入って来た。

連邦士官「助けて・・・助けてくれ・・・うわああああー」

チュドーン

と言う音がなり、通信が途絶える。

オペレーター「ひっ！！」

オペレーターは怖さのあまり、通信機を手放すほどだ。

コロンブス艦長「急いで積み荷を放出する。さっさと持って行ってくれ。艦隊が心配だ！」

そう言って、コロンブスは積み荷のジム・スナイパーカスタムを放出する。

ビーツビーツ

突如アラートが鳴り響く

オペレーター「！！コロンプス上方！敵艦？。ムサイ級のパトロール艦隊と推定！」

艦長「こんなときに！！第24ジム小隊に迎撃させる。シンディ曹長、直ちに攻撃してくれ」

整備兵「待つてください。今班長は留守です。戻り次第、給弾して攻撃させます」

艦長「くっ！・・・わかった」

艦内は、パニックになり、3機のジム・コマンドは迎撃へと向かった。

オペレーター「高熱源体6機接近します。」

そう言った瞬間だった。

ビュッ

と言う音と共に、コロンプスを大量のビームが貫く。

コロンプス艦長「うわあああああー・・・」

ビームで蜂の巣にされたコロンプスは、爆炎に包まれる。

オペレーター「コロンプス大破！！」

艦長「緊急回避！！次弾くるぞ！」

オリオンが急旋回する。今までオリオンがいた場所には大量のビームが走る。

ユウト「ジオンにビーム兵器を持ったモビルスーツなんているのか！？」

オペレーター「6機の内、3機はザクタイプ、残り3機は・・・テキサスで確認された新型機です！！」

艦長「ジオンの新型機だと！くっ！対空迎撃！！」

オリオンが弾を上方に向かって撃ち始める。

ビリー「こちら第24ジム小队！敵機と交戦を開始する！！」

3機のジム・コマンドは息のあった動きで、敵機と交戦を開始する。

ユウト「俺にも・・・なにか出来ることはないのか！！」

整備班長「こちら受領班！！まもなく着艦する」

整備班長から通信が入る。

ユウト「（そうだ！機体が届けば出撃できる！）」

しかし、調整をまともにすませずに出撃するのは、危険だというのは、ユウトでもわかっていた。

ユウト「(でも、やらないで後悔するのは嫌だ。せめて・・・やっ
てから後悔したい!!)」

ソロモンでの事を思いながら、ユウトはノーマルスーツがある部屋
へと向かうのだった。

ソーラレイ照射（後書き）

相変わらずの駄文ですいませんm（　　）m

何か、コメント、感想がありましたら、何もきにせずお願いします
m（　　）m

戦闘のくだりは、次回へ持ち越しです？

これから、更新おくれがちになりますが、生暖かい目をお願いします
すm（　　）m

新型機の脅威（前書き）

更新遅れるんで連投します。

寝ぼけながら書いたので、間違えまみれなのは許してください m)

——) m

新型機の脅威

整備班長「今戻った！離脱出来ないのか？」

帰還した整備班長が、慌てながら、通信を寄越して来た！

艦長「おそらく無理だ。敵新型機はビーム兵器を所持しているし、上方にはムサイがいる。迎撃するしかない！」

絶望的な状況だった！

整備班長「くそっ。この機体さえ動けばな・・・」

艦長「まだ、調整がすんでいないんだ。出ても落とされるだけだ！」

整備班長「そうか・・・」

艦長「とにかく、シンディ機の給弾を済ませてくれ！」

整備班長「わかった。」

そう言って、整備班長は周りの整備員に命令をだす。

ロボ「こいつら！早いんだよ！」

マイク「ちくしょおおおー」

ビーム・ガンを連射しながら、ロブとマイクがぼやく。

ビリー「お前ら！慌てるな。陣形を維持しろ！」

ビリーの怒声で陣形も戻し、迎撃をする3機。

するて、足の遅い戦艦から仕留めるつもりなのか、1機の新型機とザクが1機、計2機が、オリオンへと向かう。

ビリー「行かせるか！」

すぐさま、ビリーが迎撃に向かおうとするが、ザクにより阻まれてしまう。

ビリー「くそっ！艦長、そっちに2機行った！」

艦長「わかった。シンディ機、まだか？出撃急がせろ！」

整備班長「今終わった！」

シンディ「迎撃に向かいます！」

シンディのキャノンは、接近する2機に向かって迫って行く。

シンディ「まずはザクね・・・当たりなさい！」

ビーム・ライフルをザクに向かって発射する。

しかしザクは、いとも簡単に回避してしまふ。

シンディ「手慣れてるわね・・・きゃっ！」

シンディのビーム・ライフルを新型機のビームが貫く

シンディ「しまった！くっ・・・」

バルカンで牽制しながら、後退する。

しかし、ザクがヒートホークを構え接近してくる。
何とかかわすも、完全には避けきれない。

ジュッ

という音と共に、キャノンが溶断される。

シンディ「そんな・・・嘘でしょ！」

そして、武器をなくした。キャノンに新型機が迫る。

シンディ「きゃああああー」

ユウト「逃げ・・・逃げええ！」

ユウトは走りながら、甲板へと向かう。

ブシュッ

という音と共に甲板と艦内を隔てているドアが開く。

整備班長「ん！？ユウト！どうしたんだ！今忙し」

ユウト「新型機で出ます！」

ユウトは整備班長が言い終わる前に言い切り、新型機へと向かう。

整備班長「なっ！？待て、調整が住んでいないんだ！死ぬぞ！」

ユウト「いかせてください！俺は・・・もう後悔したくないんです
！！」

整備班長「そんなこと言っただってな・・・」

すると、静観していた艦長が口を開いた。

艦長「いかせてやれ。」

静観班長「はっ！正気か！？」

艦長「もちろん正気だ。今出さなければ、確実にやられる。それに、
伍長の意思は固いようだしな。」

ユウト「艦長・・・」

艦長「だが・・・条件がある。・・・1人も死なすな！私はこれ以
上、部下の死は見たくはないんでな・・・」

そう言って、通信は切れた。

整備班長「はあっ。行くんだろ？武器はボックスタイプ・ビーム・
サーベルユニットが2つだ。簡単にはいえば、サーベルが腕にくっ

ついでるんだ。後はお馴染みバルカンしかない。いいんだな？」

ユウト「了解です。・・・なっ！シンディが！！」

今まさに、シンディのキャノンはザクにコックピットを切られそうになっていた。

ユウト「シンディイイイイ」

ジム・スナイパー・カスタムは、フルスロットルで宇宙へと飛び出した。

その早さはジムの比ではない。

シンディ「そんな！ここまでなの！？」

シンディはギョツと目を瞑り、これからくるであろう死に備える。

しかし、その死は来ず、ズバツという音と共に、爆発音が響く。

シンディ「えっ！？何が？」

恐る恐る目を開くと、そこには、真っ二つになったザクと、見た事がない、緑色のジムがいた。

ユウト「シンディ！？無事か？」

シンディ「ユウト！？何で？それにその機体は！？」

ユウト「これは・・・」

言い切る前に、新型機が2機に迫る。

ユウト「話は後だ。艦に帰還しろ！」

シンディ「わ、わかったわ」

シンディのキャノンが下がる。

ユウトはそれを確認すると、右手のビーム・サーベルユニットを出した。

ビーム・サーベルで新型機に迫る。

ユウト「くっ、やっぱり反応が遅い！ビーム・サーベルの出力も安定しないか！」

調整していない機体は、ただでさえ、エース用で扱いづらいのに、更に扱いづらくなっていた。

ユウト「けど・・・やるしかないんだ！」

新型機にビーム・サーベルで切りかかる。

それを、新型機は、なぎなたのような・・・ビーム・ナギナタを出して来た。

それで受けると、もう片方の刃を回して、腕を切り落とそうと、狙ってくる。

ユウト「何だよそりゃ!?!」

愚痴りながら、回避する。

ユウト「こつちだつて……2本あるんだよ!」

新型機の右手へ回避し、左手のビーム・サーベルユニットをだす。

ユウト「いつけええええー!」

ビーム・サーベルを新型機の横から、胴体に突き刺す。
じゅっうううう

と言う音が響き、サーベルを抜くと、新型機は爆発した。

ユウト「やった!後は……ビリー達の救援だ!」

ユウトはジム・スナイパー・カスタムをビリー達の方向へと向かわせた。

ビリー「ちいっ!」

ビーム・サーベルで新型機ときりあう。

ビリー「しっしっ」

ピーッピーッ

言い終わる前に、接近警報のアラートが響き、ビーム・サーベルにより、新型機は真っ二つにされる。

ビリー「何っ?」

ユウト「ビリー!大丈夫か?」

ビリー「ユウトっ!その機体は?」

ユウト「新型のジム・スナイパー・カスタムだ。」

ビリー「そうか!そいつさえあれば楽勝だな。」

ユウト「いや、まだ安心できない。調整がすんでないんだ。」

ビリー「そうなのか・・・よし、援護する。行くぞ!」

ユウト「わかった!」

そう言って、2機はチンピラ2人の援護に向かう。

ロボ「やべえ!きついぜ!」

マイク「どうすんだよ!」

2人は混乱しきっている。

既に、ビーム・ガンの弾は突き。いつやられても良くない、防戦一方だった。

ユウト「チンピラ2人、生きてるか!」

ロブ&mp・ユウト「ユウトか！助かるぜ！」

ビリー「ユウト！行け！」

ビーム・ガンの牽制射を受けながら、ザクへと切りかかる。

ユウト「いつけええええー」

右手は、マシンガンを切り裂く。

ユウト「はずしたか！だけど・・・2本あんだよ！」

左手のサーベルでコックピットを突き刺す。

引き抜くと、ザクは慣性の法則で、宇宙へと漂っていく。

形成不利と見たのか、ザクと新型機はムサイへと引き上げて行った。

ユウト「ふうっ。帰還する」

ビリー「やったな！ユウト凄いじゃねえか！」

ユウト「機体のおかげだよ」

ロブ&mp・マイク「そうだそうだ。俺たちも新型さえあ」

ユウト「黙れチンピラ2人組」

すっかり定着したあだ名により沈黙する2人

4機はオリオンに着艦する。

ユウト「はあっ、何とか勝てたか。新型機すげえな」

整備班長「まあな・・・調整は徹夜だな」

気分よくそんなことを言ってくる班長

ユウト「うげえ！本当ですか？」

整備班長「大マジだ。だよな？艦長？」

すると、艦長から通信が入る。

艦長「もちろんだ。しっかりと整備しろよ。」

ユウト「はああ・・・」

ため息をつくユウト

ユウト「そう言えば・・・あの光は!!」

今まで忘れていたことを思い出した。

すれと艦長は、顔をしかめながら、

艦長「レビル將軍が戦死、兵力の3分の1がやられた！」

ユウト「うそだろっ!!そんな馬鹿な!？」

艦長「本当だ。連邦が使った。ソーラ・システムと同じ奴だそうだ。」

ユウト「そうなんですか・・・」

この話で、艦内は、ユウト達は、一斉に静かになる。

艦長「まあ、後は上が決めることだ。伍長はさっさと調整をすませる。」

ユウト「・・・わかりました・・・」

ユウトはちからなく答えると、ジム・スナイパー・カスタムのコックピットへと向かった。

ユウト「終わったあああー！」

そう言っつて自分のベッドにたおれこむユウト

既に、あれから数時間が経過している。

ユウト「このまま寝るかな・・・」

そんなことを考えていると

シンディ「ねえ、ユウト起きてる？」

そう言っつてシンディが入っつて来た。

ユウト「（こんな時間に男の部屋に！？危ないぞ！・・・俺は紳士だから大丈夫だがな）」

やましい事を考えていると、いきなりシンディが抱きついてきた。

ユウト「シンディっ！何を！」

シンディ「さっきのお礼・・・言えてなかったから、それに・・・それに・・・！」

顔を真っ赤にしながら呟くシンディ

ユウト「（かわええええええええええー）」

ちと、興奮してしまうユウト。

ユウト「そ、そうなのか。」

そんなことは表にださず、無難な対応をする。

シンディ「あ、ありがとね！そ、それと・・・ゴニョゴニョ」

いいよどんでしまっつシンディ

ユウト「どっつしたんだ？」

乙女心の解らないユウトは、失礼な対応をしてしまっつ。

シンディ「そ、その！お、お、お礼に・・・キ・・・キ・・・！あ
ー、もういい！ユウトのバカ！」

放たれる右ストレートは、ユウトの腹を直撃した

ユウト「ぐぼあっ！..！」

一発でKOするユウト

シンディは怒って出て行ってしまった。

ユウト「(女つてのは・・・解らん!)」

そして、ユウトの意識は途絶えた。

この日、地球連邦軍は、作戦を強行し、ア・バオア・クーへと進行する事を発表した。

新型機の脅威（後書き）

相変わらずひどい話です。

自分のながら、泣けて決まず（――）

いよいよクライマックスです！

終わった後の事を考えなくては・・・

何かリクエスト、感想などありました、お気軽にお願いしますm（

――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8387w/>

機動戦士ガンダム 学徒兵の戦争

2011年10月29日03時15分発行